

関西英語教育学会 2015 年度（第 20 回）研究大会

発表要旨一覧（申込順）

1 本田隆裕（神戸女子大学）研究発表

"Effects of a Morphological Approach to Raising Learners' Consciousness to Copular Sentences"

This presentation investigates the effectiveness of a morphological approach to raising Japanese learners' consciousness to Japanese copular sentences.

Tode (2002) reveals that the ability to discriminate Japanese copular sentences from non-copular sentences is related to learning the suppliance rule of the English copula *be*.

However, the traditional teaching method in Japan just explains that copular sentences have the form "X BE Y", where Y is a noun phrase or an adjective phrase and describes the state or property of X. This explanation is too complicated to help learners with discrimination of Japanese copular sentences from non-copular sentences.

Thus, this study developed a new method so that learners could realize that the morpheme /-ar-/ in Japanese, which Nishiyama (1999) calls the dummy copula, corresponds to the English *be*. We assume that this morphological method contributes to raising learners' awareness of Japanese copular sentences.

To examine whether our morphological method is more effective in raising learners' consciousness to copular sentences than the traditional one, 201 senior high school students participated in this study and were divided into two groups, a traditional approach group and a morphological approach group, who received different types of instruction. We administered a pre-test and a post-test, where they were asked to judge whether a given Japanese sentence was a copular or non-copular sentence. The morphological group made statistically significant gains in their learning after the instruction, but the traditional group did not. Therefore, we can conclude that the morphological approach is more effective than the traditional approach.

2 中原 功一郎（関東学院大学）研究発表

「ユニバーサル化した大学の英語専攻以外の学部における英語教員の役割」

森田（2010）は、大学教育における体育と外国語の類似性を指摘し、体育教員が健康教育や運動の機会の提供などに終始すれば大学での体育は不要と言われかねない、外国語教員がスキル教育に終始すればアウトソーシングされる危険性がある、と述べている。そして、体育教員の教養教育、専門教育への貢献の重要性を説いている。同論文は、体育教員によるものであるが、英語教員にも示唆を与えるものとして興味深い。

そこで、当発表希望者は、「ユニバーサル化した大学の英語専攻以外の学部における英語教員の役割とは何か」という問題を設定した。

上記の問題を検討するにあたり、森田の主張を読み込み、大学の変革、教養教育、専門教育などについての先行研究を参照し、当発表希望者の所属する関東学院大学経済学部における 1990 年代後半以降のカリキュラム改革とその時々の検討事項や検討の材料としてもちいた各種調査の結果を振り返った。さらに、新たなアンケート調査も行った。

上記のようなプロセスを経て、ユニバーサル化した大学（英語専攻以外の学部）においては、体育教員と同様に、英語教員にも、スキル教育のみならず、教養教育、専門教育への関与が強く求められているという結論に至った。

3 山本 元子（常磐会学園大学）・ 和田吉雄（大阪市立開平小学校）研究発表

「小学校外国語活動における「書くことの指導」に関する一考察」

文部科学省は、2020 年に小学校段階での英語の教科化の方針を打ち出した。現行の外国語活動では音声による指導を中心とし、文字は児童の学習負担を理由にあくまで補助として扱うこととした。しかしながら、文字が（学習）記憶を呼び覚ますキューとなり得ることや、「難解なことにチャレンジしてみたい」というこの時期特有の児童の発達段階を考慮すれば、文字指導を適切に行うほうが、指導しないよりも児童の英語学習を促進するのではないかと考えた。

それでは、文字を使用した効果的な英語指導とはどのようなものであろうか。また、そのような指導の結果、児童はどのように変容を遂げるのであろうか。

本発表では、ある政令指定都市の平均的な公立小学校における、1つの学年、2クラスの2年間の実践から、文字指導を積極的に行ったクラスとそうでなかったクラスの英語に対する意識調査を含めた実践結果を比較、考察する。そのなかで浮かび上がった課題を検証し、あわせて結果から、来る英語の教科化にどのような文字指導が有意であると考えられるか述べていく。

4 秦正哲（兵庫医療大学） 研究発表

「わかりおメソッド：新しい英語音素指導法」

本研究の目的は、英語音素記号に分かりやすい呼称を付けることに基づく新しい英語音素指導法である「わかりお式英語音素指導法」（略称：わかりおメソッド）を理論的に提示することである。これまで英語指導において、英語における単語の綴りと音声との間の隔たりを克服するために、音素記号を指導することが行なわれてきた。しかし、英語音素記号に分かりやすい呼称を付ける試みはほとんど行われてこなかった。そのため、英語音素記号に分かりやすい呼称が付けられていないことが、英語音素の指導および習得を困難なものとしてきた一因であると考えられる。このように考えると、英語音素記号に分かりやすい呼称を付けることに基づく英語音素指導法を確立することにより、英語音素の指導をより効果的なものにできる可能性がある結論づけられる。わかりお式英語音素指導法においては、音素記号呼称を「音素記号想起用英単語」＋「音素記号」という形式で表す。音素記号想起用英単語は、英語音素記号を想起する役割を果たすことを目的として使用される初学者用英単語である。具体的な音素指導モデルも提示する。

5 平尾日出夫（追手門学院大学） 事例報告

「インターネット教材を使った留学生に対する遠隔学習」

最年のグローバル人材育成の意識の高まりから、在学中に就学期間はそのままとする制度を利用して海外留学に出る学生が多くなった。この場合問題となるのが、留学中の学生にどのような教育内容を提供するかである。認定単位ですべて必要な単位を認定できればよいが、そうできない科目も存在する。専攻の必修科目の単位をどのように取得させるかが問題となる。このように何らかの指導を留学中の学生に行わなければならない場合、インターネット教材の利用が有利となる。世界中どこからでも、いつでもネット環境さえあれば、学生が学習を行うことができるからである。

このような観点から、2014年度後期にグローバルキャリアコースと交換留学制度で留学した16名の学生に対して、筆者が公開した英語学習教材アーカイブの教材を利用した遠隔学習を行った。本発表はその経過と結果を報告するものである。

学習の結果は、おおむね良好であり、事後の学生の感想も好意的であった。すでに英語圏に留学していても、英語の学習を行うことが学生にとって有益かつ効果的であることが判明した。

6 高木浩志（宝塚市立西谷中学校）事例報告

「公立学校における幼小中一貫した英語教育の展開に向けて」

小学校の英語教育が2020年の導入に向けて、条件整備が進んでいる。中学校の内容の一部が、小学校に降りていくことも考えられる。関連して、中学校の英語教育も、授業は英語で進めることや授業内容が発展的な内容になることが予想される。また、指導にあたる教師の研修等においてもそのような内容を考慮して展開している。一方、転勤により、幼小中の結びつきの強い中学校に異動してきたことで、幼小中の英語教育の展開を考える機会を得ている。この中で、基準をしっかりと考えて、少ないスタッフができる効果的な指導方法やカリキュラムを考えたい。幼稚園から中学校まで同一の学校内で育っている子供たちの英語学力を向上させる環境整備をしっかりと考え、取り組んでいることを発表していきたい。

7 谷野圭亮（大阪教育大学大学院生）事例報告

「日本の高等英語教育における内容言語統合学習（CLIL）の導入：教育用 Social Networking Website『Edmodo』を利用した反転授業形態を取り入れた実践報告」

筆者は公立の工業高等専門学校第三学年を対象とした英語授業において、授業外学習の質・量の向上とそれに伴う授業内における対面活動に割く時間の確保の為に「反転授業」を導入した。反転授業の実施には、教育用 SNS『Edmodo（エドモド）』を活用することにより、比較的安価かつ効率的に教員と学生とのウェブ上のやりとりを可能にした。英語授業では、ヨーロッパ発祥の『内容言語統合学習（CLIL）』の観点を取り入れ、実用的な英語力育成を目指している。

実践前に学生に対して実施したアンケート調査からは、英語学習に対する意識を問う項目に対して多くの学生は「よくあてはまる」という傾向が明らかになったが一方で自らの学習の到達目標が思考力であるかどうかを問う項目に対しては、多くの学生が「どちらともいえない」もしくは「あてはまらない」という結果であったが、実践が進むにつれ、授業中の活動時間の確保という面と学生の高次思考力の育成という面において如実に効果を感じるようになった。今回の報告では、どの学校でも明日から実践できる反転学習の方法、および効率的かつ学生の変化が実感できるような英語授業の方法を提案する。

8 船越貴美（神戸学院大学附属高等学校）・池亀葉子・竹田里香（特定非営利活動法人 Creative Debate for GRASS ROOTS） 事例報告

「高等学校における英語落語の実践報告—総合学習での試み」

神戸学院大学附属高等学校では 1 年次に総合学習の時間を設けている。毎週木曜日に 2 時間（90 分）を割り当て、10 のテーマから生徒が好きなテーマを選んで履修する。英語落語は 2013 年入学の生徒から開始したテーマで、特定非営利活動法人 Creative Debate for GRASS ROOTS の池亀葉子氏に直接指導をお願いしている。英語落語のテーマの目的は、落語を英語で演じることで伝える英語を体で学び、英語による表現力と度胸を鍛えることである。たった一人で舞台上で演じる必要があるため、第 1 希望として受講する生徒はほとんどいない。2013 年度の受講生は 5 名、2014 年度の受講生は 7 人、2015 年度の受講生は 5 名であった。いずれも第 2 希望から第 5 希望で受講していた。

授業は共通の小噺を練習し、並行して英語の発音指導と文法の暗記を行う。受講者は英語が特に好きな生徒たちではないが、池亀氏独自の発音指導で英語の音韻を身につける。共通の小噺を練習することで、落語の所作や演技を覚え、徐々に落語らしく演じることができるようになる。発表では受講者の上達の変化や気持ちの移り変わりや発表の様子を、事例を交えて報告する。

9 三野宮春子（神戸市外国語大学）・長谷川和代（NPO 法人 GATE（小学校英語活動支援団体））・山根貴子（姫路市立飾磨高等学校）・大濱さおり（南あわじ市立松帆小学校）・土井幹生（神戸市外国語大学学生） 公募ワークショップ：「創造的コミュニケーションを支える語彙・文法学習のための「めっちゃ楽しい！」アクティビティ紹介」

本発表の目的は、以下に述べる 3 つの特徴を備えた自作アクティビティのいくつかを紹介することである。より長期的には、本発表をきっかけに多くの教育者・研究者たちとビジョンを共有し、暗記と再生に偏りがちな英語授業からの脱却を共に模索してゆくことを目指したい。

紹介するアクティビティに共通する特徴の 1 つめは、「聞く・読む・話す・書くなどの活動において語彙や文法を学習できること」である。語彙や文法は、技能と組み合わせて、使いながら練習しなければ、コミュニケーションを支える知識にはなり得ない。本発表では、学習者が楽しみながら参加しているうちに語彙や文法を自然に使うようなアクティビティを紹介する。

特徴の 2 つめは、「即興的・協働的な意味交渉が起こりやすくなるように構造を設計することによって創造的言語使用を刺激すること」である。生徒が各自で準備したことを発表するような予定調和的な表現活動ばかりでは、その場で

相手と意味を創っていく真正なコミュニケーションを行う力は育たない。本発表では、話すことを事前に準備できにくくする条件と全員を意味交渉にまきこむ構造を備えたアクティビティを紹介し、その結果どのような創造的言語使用が起こりやすくなるかを検証する。

最後の特徴は、「思考・身体・感情を統合的に使いながら学習者が英語話者へと変容していく過程に働きかけること」である。まるで思考・身体・感情は分離可能であるかのように錯覚し、思考だけに働きかけようとする英語教育には、はじめから無理がある。生きた言葉を発したり聞いたりするときは、身体が反応し、心が動く。そのような体験をしながら英語を学習するためのアクティビティを提案したい。

上述のようなアクティビティは、主に即興演劇（インプロ）の手法を応用して、発表者たちが開発し使用して、効果を確認したものである。応用インプロは、日本でも企業研修や他領域の教育では注目を集めているが、実は言葉の教育との相性が非常によい。紹介する予定のアクティビティは、学習者のニーズや目的に合わせて調整すれば、小中高大の授業で幅広い使い方が可能である。また、教師にも学習者にも、演劇経験や特別な才能は全く要求されない。英語授業を劇的に豊かに変革する（と発表者たちは信じている）ための、いくつかの原則と、いくつかのアクティビティを、ぜひ自分の頭と体と心で体験し確かめてもらいたい。